

# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えは長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には《珠玉の短篇》という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別すぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することになりました。単に短篇・文化・記録映画愛好家の方々のみならず、広く一般の映画観覧者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1983年3月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に上映を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

4月2日(土) 午後4時30分開映  
—J・プロワレヴィ・パレエ映画選集—

## 結婚紹介所

レディション・フランセーズ・シネマトグラフィク1952年作品  
監督=ジャン・プロワレヴィ 助監督=マリー・エプスタン 撮影=アンドレ・ダンタン 美術=アレクシス・ド・シエル 衣裳=マリー=アンジュ・シュリックリン 演奏指揮=リシャル・ブラロー 音楽=ジャンニヌ・リュフ 振付=レオヌ・メール 出演者=ドニエズ・ブルジョワ(ピアンノ)、ニコール・トゥータン、ジャクリヌ・エスタンプ 白黒 13分

## 短剣

### Le poignard

音楽=イヴァン・コーガン=スメノフ 振付=ジャン・パピレ(製作年及び他の製作クレジットは上に同じ) 出演者=ジャン・パピレ(若い男)、クセニア・パレ、セルジュ・ペロー 白黒 13分

## ダンス会議

### Le congrès de la danse

音楽・演奏指揮=リシャル・ブラロー 振付=エドモン・ランヴァル(製作年及び他の製作クレジットは上に同じ) 出演者=ドニエズ・ブルジョワ(モノコの女性委員)、ベアトリス・ペス、エドモン・ランヴァル 白黒 14分

## 橋の下で

### Sous les ponts

音楽=イヴァン・コーガン=スメノフ 振付=レオヌ・メール(製作年及び他の製作クレジットは上に同じ) 出演者=ドニエズ・ブルジョワ(絶望した女)、シュザンヌ・サラベル、ロジェ・フェノンジョワ 白黒 13分

## 一人の召使に二人の主人

### Deux maîtres pour un valet

音楽=ジャンニヌ・リュフ 振付=レオヌ・メール 出演者=ヴィオレット・ヴェルディ(若い娘)、アンドレ・ルリエール、N・トゥーター 白黒 13分

\* \* \*  
戦前、「母の手」「美しき青春」「白鳥の死」などでロマンティックな映画に才腕をふるったジャン・プロワレヴィ(1888—1959)は、戦後になって長年にわたる協力者マリー・エプスタンと共に今回上映するような短篇パレエ映画を製作した。3作品でブリマ・パレリーナを演ずるドニエズ・ブルジョワはクエバ(侯爵大パレエ団の花形で、「ラ・シルフィード」(1953年上演)の許嫁役など)が有名。「短剣」で主演と振付を兼ねるジャン・パピレ(1923年生まれ)は、18才で主役を演じ、1946年《若者と死》で高い評価を得た。《ジゼル》(1952)のアルペール王子役も有名。尚、上映作品は全て日本未公開である。

5月7日(土) 午後4時開映  
—吉見泰=小林米作選集—

## ミクロの世界—結核菌を追って

東京シネマ1958年作品  
企画=中外製薬 製作=岡田桑三 脚本=吉見泰 演出=大沼鉄郎、杉山正美 撮影=小林米作 編集=伊勢長之助 録音=片山幹男 音楽=松平頼則 解説=篠田英之介 カラー 30分

## マリン・スノー—石油の起源

東京シネマ1960年作品  
企画=丸善石油 製作=岡田桑三 脚本=吉見泰 撮影監督=小林米作 演出=野田真吉、大沼鉄郎 撮影=春日友喜、豊岡定夫 照明=田畑正一 録音=片山幹男 音楽=間宮芳生 造型=武田謙之助 解説=高島陽 カラー 25分

## 生命誕生

東京シネマ1963年作品  
製作=岡田桑三 脚本=吉見泰 演出=渡辺正己、大島正明 撮影監督=小林米作 撮影=浅野勲、永井弘道 録音=片山幹男 音楽=柳慧 解説=篠田英之介 カラー 17分

### \* \* \*

(東京シネマ)は1954年に岡田桑三によって設立された文化・記録映画の製作会社である。岡田は《山内光》の芸名で戦前の松竹映画で二枚目の俳優として活躍した経歴を持っている。短篇映画のカラー版PR映画「ビールの誕生」(1954)を発表して注目を集めた。この作品に脚本=吉見泰、撮影=小林米作が既に参加しており、次々に意欲的な作品を送り出すことになった。《東京シネマ》の作品の特長は、科学的、学問的視点に立ってミクロの世界に題材を求め、顕微鏡を利用して特殊撮影技術を駆使することであった。

「ミクロの世界」は、副題に《結核菌を追って》とあるように、結核菌、白血球、核細胞などの動きを、顕微鏡でとらえて判り易くその実態を映像化したものであり、日本の文化・記録映画史上特筆すべき成果を上げ、学問的にも高く評価された。この作品は国内の大方の賞を独占し、国際的にも、ヴェネツィア国際映画祭で記録映画部門のグラン・プリを受賞した。「マリン・スノー」は石油の起源物質としてのプラントンの生態をミクロ撮影でとらえ、その知られざる世界を芸術的な美しさで描いたものである。「生命誕生」はニワトリの受精卵から胚盤を取り出し、成長の過程を追った作品で、崇高な美と神秘の世界を感動的に描いている。

良心的作品を旨とした製作スタッフの熱意の結晶が《東京シネマ》の秀作群であり、国の内外で高く評価されたその製作方針と技術は一時代を築いた。

6月11日(土) 午後4時開映  
—荻下泰司アニメ選集—

## 動物大野球戦

日本動画映画1949年作品  
製作=山本善次郎 脚本=桑木良三 演出=荻下泰司、熊川正雄 録音=小沼渡 効果=園田芳童 音楽=坂本良隆 声帯模写=木下華声 白黒 11分

## うかれバイオリン

### 日動映画1955年作品

企画=山崎季四郎、山本早苗 脚本=演出=荻下泰司 原画=大工原章、森康二、古沢日出夫 色彩監督=背景=中島清 撮影=高城泰策、石川光明 音楽=坂本良隆 独唱=三枝喜美子 コニ・カラー 16分

## こねこのらくがき

### 東映教育映画部1957年作品

企画=赤川孝一、山本早苗 演出=荻下泰司 撮影=石川光明 音楽=伊藤彦二 作画=森やすじ、大工原章ほか 白黒 13分

## 一寸法師

### 日動映画1956年作品

製作=山本早苗 脚本=演出=荻下泰司 原画=大工原章 撮影=石川光明、田島実 音楽=横田昌久 白黒 15分

## 黒いきりりと白いきりり

### 日動映画1956年作品

製作=山本早苗 原作=浜田広介 脚色=森康二 演出=荻下泰司 原画=森康二、熊川正雄 撮影=石川光明、佐倉紀行 音楽=斎藤高順 フジ・カラー 15分

### \* \* \*

荻下泰司(本名=泰次、1903年生まれ)は東京芸術大学卒業後、松竹蒲田撮影所に入社して現像部でフィルムの多色処理の研究に従事する。その後文部省の教育映画の普及と製作に関与し、戦後、日本動画株式会社に入社する。その後、日本動画は日動映画社となり、戦後の日本アニメーションの発展に大きな役割を担った。荻下はその会社の代表の一人として、アニメの製作と後進の指導にあたった。日動映画社は東映動画社へと発展解消するが、荻下は東映動画の製作部長として、日本初のカラー長篇アニメ「白蛇伝」(1958)の完成に大きく寄与した。その後東映の長篇アニメが国際的にも高く評価されて今日に至っていることは周知の通りである。日動映画や東映動画時代を通じて、荻下は常に陣頭指揮をとりながら、数多くのアニメーターを指導・育成し、戦後の日本アニメ発達史に多大な貢献をした。



# 夏休み年少少女名作鑑賞

少年時代から鑑賞眼を養い高めるといことは、将来の人間形成に役立つものが多分にあります。そこで、夏休みの期間に少年層でも理解できうるであろう心に残る映画を選んでここに特集をつくりました。ジュニア版フィルムセンターとして、御家族ともどもご利用いただきたいと存じます。

1983年7月 フィルムセンター

■上映は午後3時より1回のみで、午後6時15分開映の「ジョン・フォード監督特集」とは全館入れ替えとなります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

期 日	題 名	製 作 年	監 督	出 演 者
8月8日(月)	3時 路傍の石(124分)	日 活・1938年	田 坂 具 隆	片山明彦、滝花久子、山本礼三郎、小杉勇
9日(火)	3時 次郎物語(85分)	日 活・1941年	島 耕 二	杉幸彦、杉裕之、轟夕起子、杉村春子
10日(水)	3時 虹をかける子どもたち(86分)	エキブ・1980年	宮 城 まり子	ねむの木子どもたち
11日(木)	3時 ビルマの竖琴(115分)	日 活・1956年	市 川 崑	安井昌二、三国連太郎、三橋達也、北林谷栄
12日(金)	3時 愛と死をみつめて(117分)	日 活・1964年	斎 藤 武 市	吉永小百合、浜田光夫、笠智衆、内藤武敏

## 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言え長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には(珠玉の短篇)という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画の中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から《短篇・文化・記録映画特集》番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1983年7月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

8月6日(土) 午後4時開映

— 荒井和五郎影絵アニメ選集 —

### お蝶夫人の幻想

朝日映画社1940年作品

製作・切抜・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 作詞・作曲・独唱＝三浦環 合唱＝三浦環声楽団 白黒・12分

### ジャックと豆の木

朝日映画社1941年作品

原案・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 音楽＝福田宗吉 演奏＝朝日映画管絃楽団 白黒・15分

### かぐや姫

朝日映画社1942年作品

原案・構成・撮影＝荒井和五郎、飛石伸也 作詞＝横尾三千代 作曲＝小船幸次郎 独唱＝葦原邦子 演奏＝フィルハーモニー四重奏団 白黒・25分・無声版

### マッチ売りの少女

日本漫画映画社1947年作品

製作＝本多春雄 脚本・演出＝荒井和五郎 作画助手＝須賀嘉行、岡見弟三、柿田清二、高木祐子 音楽＝安倍盛 舞踊振付＝石井漢 演奏＝ピクチャー室内管絃楽団 録音＝東亜発音 白黒・10分

影絵・人形映画作家の荒井和五郎(1907年生まれ)は幼少の頃から映画の魅力にとりつかれ、日本歯科大学に在学中、当時公開された影絵映画「アクメッド王子の冒険」(1926年、ロッサ・ライニガー監督)に強い感銘を受け、ついに医師仲間の飛石伸也との協力を得て第一作「黄金の鉤(つりばり)」を発表した。これは神話(海彦山彦)の物語を素材とした作品で、自主作品として9.5ミリ版として作られたが、完成度の素晴らしかったところから、35ミリ版に作り直して東和商事の配給で新宿文化ニュース劇場で封切られた。

次に発表されたのが「お蝶夫人の幻想」で、歌劇「蝶々夫人」に題材を求め、優雅な動きと幻想味あふれるこの作品は、日本影絵映画の代表作ともいえる出来栄えとなった。なお、録音の際に原曲の著作権者より多額の著作権料を要求されて困難に面した時、当時のプリマドンナ三浦環女史の全面的協力を得、彼女の新たな作詞・作曲を得て完成されたという。

「ジャックと豆の木」はイギリスの民話を影絵化したおなじみの話であり、「かぐや姫」では荒井が得意とする日本の幻想的世界を影絵化しており、その抒情的世界は他の追随を許さぬものがあり、故大藤信郎と共に日本影絵史に大きな足跡を残している。

9月3日(土) 午後4時開映

— 西尾善介選集 —

### 黒部狭谷

日本映画新社1957年作品

企画＝関西電力株式会社 製作＝堀場伸世、藤本修一郎 脚本・演出＝西尾善介 撮影＝林田重男、丸子幸一郎、潮田三代治、藤田正美、今村俊輔 編集＝伊勢長之助 音楽＝別宮貞雄 解説＝藤倉修一 録音＝国島正男 カラー・35分

### 黒部狭谷第2部 地底の凱歌

日本映画新社1959年作品

企画＝関西電力株式会社 企画担当＝水島羊之介 製作＝堀場伸世、藤本修一郎 脚本・監督＝西尾善介 撮影＝藤田正美、潮田三代治 撮影助手＝浅野恒夫 音楽＝別宮貞雄 解説＝藤倉修一 録音＝国島正男 カラー・53分

記録映画作家西尾善介(1915年生まれ)は、1937年に東宝映画の前身であるP.C.L.に入社して撮影部に所属、戦後は演出部に転じて木村莊十二監督らに師事した後、短篇劇映画「谷間の少女」で監督としてデビュー、52年には「パチンコ必勝法」「落語大学」の作品で興行的にヒットさせた。その後、東宝教育映画部の解散にもなってフリーとなり、記録映画の分野で精力的に活躍を始めた。

「黒部狭谷」と「地底の凱歌」は、当時の土木工学の粋を集めて開始された黒部川第四発電所の建設記録映画であり、スケールの大きな記録映画作品として数々の受賞に輝き、西尾監督の名を高からしめたものである。

黒部第四発電所の建設予定地に選ばれた黒部狭谷上流地点は、昔から人間の侵入を厳しく拒んできた難所である。そこに建設基地を設置するにしても、標高1300米の御前沢に鉄やセメントを運び上げ、悪条件のもとで人々の苦勞が始まる。これはほんの一端であり、立地条件の悪さからダム建設地点までの連絡路は全部トンネルであり、発電所も地下に設置するためのほんの入口にしかならない。建設の完成にはこれより7年を要するという前代未聞の難工事の始まりである。映画は黒部の大自然と四季おりおりの美しさを描きながらも、その前では人間の知恵や力をも打ちこわす大自然の力を余すところなく描いている。人間と自然との一進一退の対決ぶりは、劇映画をものごんばかりのドラマティックな迫力を生み出し、スタッフ一同の苦勞の様子が推しはかれるであろう。

この作品の脚本・監督にあたった西尾監督は、本年(1983年)1月29日に措しまれつつ逝去された。



# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には〈珠玉の短篇〉という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画の中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から〈短篇・文化・記録映画特集〉番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1983年9月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に出札を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名(座席数204)に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

## 10月1日(土) 午後4時開映

—能と狂言—

### 葵の上

シュウ・タグチプロ1937年作品

企画=国際観光協会 製作=河合武 監修=構成=野上豊一郎 脚本=監督=山本薩夫 共同監督=伏水修 撮影=宮島義勇 録音=市川綱二

白黒・30分・英語版

〈かいせつ〉

小津安二郎監督によって六代目尾上菊五郎の〈鏡獅子〉が撮られたのは1935年であった。これは、日本の伝統芸能の一つである歌舞伎を海外で紹介するために財団法人国際文化振興会の依頼で製作されたものであった。

この作品も、上記の意図のもとに能楽を紹介しようとしたものであり、国際文化振興会の依頼を受けた河合プロデューサーが、音楽研究の権威である野上豊一郎を通じて映画化の実現につとめた。

演目は、〈源氏物語〉の〈葵の上〉に取材した幽玄な内容であり、主人公の〈六条御息所〉を演じるのは金春流の宗家桜間金太郎である。その他、宝生新、桜間意馬、光本弥一らが出演した。

撮影にあたっては、東宝の第一スタジオに本物そっくりの能舞台を設置して押し進められたが、笛の音や鼓の音が本来の能舞台のように響かず、その再現に苦勞したり、映画特有のカット割りに演者たちの不満があったりしながら完成された。

### 猿楽と壬生狂言

電通・電通映画社1976年作品

企画=日本新薬株式会社 製作=山本勝久 脚本・演出=鈴木一夫 撮影=西居資夫 照明=湊和雄 編集=三谷晴茂 音楽=牧野由多可 録音=井延順一 進行=河田兼市 ナレーター=中西龍 出演=壬生大念仏講中 カラー・30分

〈かいせつ〉

京都の製薬会社〈日本新薬株式会社〉が京都の芸能、工芸、風俗を映像化しようと企画した〈京シリーズ〉の中の1本が本作品である。

壬生狂言は、およそ700年前の鎌倉時代に、壬生寺中興の祖である円覚上人が創始したと伝えられ、仏教における勧善懲悪や因果応報の主題を無言劇として、大衆に解りやすく説明しようとして創始されたと言われる。

狂言の起源は奈良時代に大陸から渡来した農村に求められ、やがて五穀豊稔を祈る農村の神事芸能と結合して猿楽となるに及び、室町時代において観阿弥、世阿弥父子によって能楽として大成されることになる。

この素人によって演じられる演目は、〈炮烙割り〉(蟹殿) 〈餓鬼角力〉(大原女) 〈土蜘蛛〉(桶取) 〈湯立〉(椿振) などで、素朴なものにも人間味豊かなエネルギーが感じられる。

## 11月5日(土) 午後4時開映

—フランス・アヴァンガルド映画集—

### 三面記事 Fait divers

脚本=アンドレ・オベ 監督=クロード・オータン=ララ 撮影=アメデ・モラン 出演者=ポール・バルテ(紳士甲) ララ夫人(彼女) アントナン・アルト= (紳士乙) 無声・14分 1923年作品

〈かいせつ〉

クロード・オータン=ララが初めて監督した短篇映画。新聞の三面記事にヒントを得て構成された脚本は、一人の女の愛をめぐって二人の男が争い、一方の男の死で話が終るもので、三人のイメージが自由奔放に映像化されている。

### バレエ・メカニック Ballet mécanique

監督=フェルナン・レジェ 撮影=ダドリー・マーフィ 無声・11分 1924年作品

〈かいせつ〉

キュービズムの画家として知られるフェルナン・レジェが、映画芸術創草期の当時において、〈純粹映画運動〉に共鳴して作った作品。機械の一部分やポスター、ガラタなどの現実の品物から諸々のイメージを借り、リズムとハーモニーを調和させた映像の実験を試みた。

### 純粹映画の五分間

Cinq minutes de Cinéma pur

監督=アンリ・ショメット 無声・4分 1926年作品

〈かいせつ〉

この映画は前作「反射と速度の戯れ」(1923)と共に〈純粹映画〉の領域で試みられた作品群の中でも特に有名なものである。ショメット監督(1896~1941年)はルネ・クレール監督の兄。

### エマク・バキア

Emak Bakia

監督=マン・レイ 無声・14分 1927年作品

〈かいせつ〉

アメリカ生まれの画家マン・レイが、映画に取り組んだ第2回作品。現実の事物を素材とする純粹映画の部分と図形を扱った絶対映画の部分とが混じったものとなっている。

### 貝殻と僧侶

La coquille et le clergyman

脚本=アントナン・アルト= 監督=ジェルメーヌ・デュラク 撮影=ポール・ギシャール 出演者=アレクス・アラン(僧侶) ジェニカ・アタナジウ(美女) バターユ(将校) 無声・15分 1929年作品

〈かいせつ〉

女流監督デュラクが作ったシュルレアリズム映画の先駆的代表作。

## 12月3日(土) 午後4時開映

—マック・セネット喜劇集—

### 仲間たち Comrades

バイオグラフ1911年作品

脚本・監督=マック・セネット 撮影=パーシー・ヒギンソン 出演者=デル・ヘンダースン(マーマデュック)、マック・セネット(放浪者)、ハーバート・サッチ 日本未公開 白黒・13分

### メイベルの劇的な経歴 Mabel's Dramatic Career

キーストン1913年作品

製作・監督=マック・セネット 出演者=メイベル・ノーマンド(農家の女中)、マック・セネット(農家の息子)、ロスコー・アーバックル(映画館の観客) 日本未公開 白黒・11分

### やぶ蛇

His Breed and Butter

トライアングル=キーストン1916年作品 監修=マック・セネット 脚本=ハンク・マン 監督=エドワード・クライン

撮影=K・G・マクリン 出演者=ハンク・マン(給仕)、ペギー・ピアス(その妻)、スリム・サマヴィル(カフェの主人)、ポピー・ダグ(給仕頭) 日本公開1917年10月電気館 白黒・19分

### 機械人形

A Clever Dummy

トライアングル=キーストン1917年作品 製作=マック・セネット 監督=ハーマン・レイメイカー 撮影=エルジン・レスリー 出演者=ベン・タービン(用務員)、チェスター・コンクリン(小道具係)、ウォレス・ピアリー(ヴォードヴィル劇のマネジャー) 日本公開1918年2月28日オペラ館 白黒・17分

### サーフ・ガール

The Surf Girl

トライアングル=キーストン1916年作品 製作=マック・セネット 出演者=フリッツ・シェイド(船長)、レイモンド・グリフィス(助手)、ジュリア・フェイ(娘)、ロスコー・アーバックル 日本未公開 白黒・16分

\* \* \*  
マック・セネット(1880~1960)は、アメリカ喜劇映画の黄金時代の礎を築いた監督であり、コメディアンであり、チャップリンをはじめとする偉大な喜劇人やフランク・キャプラのような優れた監督を育てたことでも注目される。キャプラの述懐にもあるように、セネットはシナリオを決して使わず、自分が大笑いしたギャグだけを採用したと言われる。筋書きよりも、スピーディなギャグを重んじ、スラップスティックのジャンルを確立し、<sup>ベイジック・ベルズ</sup>「水着美人」をはじめ無条件に人の目を引く娯楽の要素を発案することにたけた映画人であった。上映する5作品には彼の映画的先見性が随所に発見できるだろう。



# 短篇・文化・記録映画特集

これまでわが国では一般的な傾向として、映画を観る人たちの間に、映画と言えば長篇劇映画を意味するものとして長篇映画のみを重視し、短篇・文化・記録映画を軽視する嫌いが見られないでもありませんでした。しかし、短篇映画には(珠玉の短篇)という言葉にみられるように短篇としての独特の良さがあがり、文化・記録映画には文化史的にみて興味深い題材が映像表現されているばかりでなく、社会的にも貴重な映像が数多く含まれていて、長篇映画にはみられない別のすぐれた価値があるといえます。

フィルムセンターでは、これまでに作られてきた数多くの短篇・文化・記録映画などの中から、優れた価値を有する作品を選びだし、それぞれのテーマに従って1時間半前後の番組を編成して、原則として毎月第一土曜日の午後4時から「短篇・文化・記録映画特集」番組を上映することにいたしました。単に短篇・文化・記録映画愛好者の方々のみならず、広く一般の映画観賞者の皆さんの御利用をお勧めいたします。

1983年12月 フィルムセンター

★午後1時30分開映の回が終了し、全館入れ替えの後に上映を開始し、午後4時より開映致します。

★先着順にて239名(座席数204)に達し次第入館を締め切ります。

一般 250円・学生 140円・小人 100円

1月7日(土) 午後4時開映  
—チャールズ・チャップリン選集(1)—

## チャップリンの失恋 The Tramp

米：エッサネイ1915年作品  
脚本・監督＝チャールズ・チャップリン  
撮影＝ローランド・トサロー (脚本・監督・撮影のクレジットは以下全て同じ)  
出演者＝C・チャップリン (放浪者)、エドナ・パーヴィアンス (農家の娘)、レオ・ホワイト、バド・ジャクソン (他の2人の放浪者)、パティ・マクガイア (農場の使用者)、ロイド・ペーコン (エドナの男友たち)、フレッド・グッドウィンス (農場主)

無声・白黒・19分

## チャップリンの女装 A Woman

米：エッサネイ1915年作品  
出演者＝C・チャップリン (女形)、E・パーヴィアンス (娘)、マーサ・ゴルドン (母親)、チャールズ・インスリー (父親)、ピリー・アームストロング (求愛者)、L・ホワイト (紳士)

無声・白黒・14分

## チャップリンの掃除番 The Bank

米：エッサネイ1915年作品  
出演者＝C・チャップリン (掃除人)、E・パーヴィアンス (タイピスト)、カール・ストックデール (入納係)、C・インスリー (頭取)、B・アームストロング (掃除人)、ジョン・ランド (セールスマン)

無声・白黒・14分

## チャップリンの改悟 Police

米：エッサネイ1916年作品  
出演者＝C・チャップリン (前科者)、E・パーヴィアンス (娘)、J・ランド (警官)、ジェイムズ・T・ケリー (酔払い)、L・ホワイト

無声・白黒・15分

\* \* \*  
サー・チャールズ・スペンサー・チャップリン(1889～1977年)のエッサネイ社作品4本を上映する。「失恋」「女装」「掃除番」「改悟」は、それぞれエッサネイ社での第6作、9作、10作、15作にあたる。マック・セネットに見い出されたチャップリンは1913年にキーストン社に入り、2作目で、山高帽にチョビ髭、だぶだぶズボンにステッキという独特のクラウン・スタイルを完成、爆笑短喜劇に監督と出演を兼ねて人気を得た。15年、エッサネイ社と契約して、15本の作品を発表、16年にはミューチュアル社へと移った。「失恋」はチャップリンの最初の傑作と言われるもので、その後「改悟」まで続くエッサネイ時代は、彼のキャラクターがもっとも典型的な開花を見せた時期だと評価されている。上映作は全て英語タイトル版である。

2月4日(土) 午後4時開映  
—ジガ・ヴェルトフ選集(1)—

## レーニンのキノプラウダ (「キノプラウダ」第21号)

### Leninskaya Kinopravda (「Kinopravda」No. 21)

ソ連：クルトキノ1925年作品  
監督＝ジガ・ヴェルトフ 撮影＝ミハイル・カウフマン、エドゥアルド・ティッセ、G・ギベール、A・レムベルグ、I・ノヴィツキー 編集＝エリザヴェータ・スヴィーロワ 無声・白黒・23分  
日本語字幕付・日本未公開

## レーニンの三つの歌 Tri pesni o Lenine

ソ連：メジラプボムフィルム1934年作品  
脚本・監督＝ジガ・ヴェルトフ 助監督＝エリザヴェータ・スヴィーロワ 撮影＝D・スレンスキー、マルク・マギドン、ペンツィオン・モナスティルスキー 音楽＝ユーリ・シャポーリン 録音＝P・シュトロ 白黒・62分  
日本未公開・ロシア語タイトル版

\* \* \*  
ジガ・ヴェルトフ(1896～1954年)は本名デニス・アルカディエヴィチ・カウフマンと言ひ、ミハイル・カウフマン、ボリス・カウフマンの兄にあたる。ミハイルはカメラマンとして兄を助け、自らドキュメンタリストとしても活躍した。ボリスは、ジャン・ヴィグやエリヤ・カザン、シドニー・ルメット等の作品で有名な名撮影監督となった。ヴェルトフは、十月革命後、ニュース映画の仕事を始め、〈キノキ〉(映画眼)と呼ばれる映画集団を結成、〈キノキ〉または〈キノグラス〉理論を発表、フィクションを捨て、現実の生活をカメラでルポルタージュすることで、映画を真実に近づけようと考えた。カメラを人間の目と同一視し、その絶対的客観性を信じ、不意打ちの撮影によって、あるがままの人間の表情を捉えようとしたのである。映画にとつて虚構ではなく真実を伝達しようとした彼はまた、字幕タイトルの研究にも熱心であった。そんな彼の実践の結果のひとつが1922年から25年にかけて計25号まで発表された「キノプラウダ」である。これは〈映画眼〉の手法によって可能になる〈映画真〉であり、仏訳の〈シネマ・ヴェリテ〉は戦後映画の大きな目標の一つにもなった。「レーニンのキノプラウダ」はレーニンの死と葬儀、悲しみを乗り越えて連帯する農民と都市労働者を描いている。「レーニンの三つの歌」も、レーニンの死を扱っているが、革命によって解放された中央アジアの人々に焦点を当てており、題名の〈三つの歌〉も彼らの詩人のレーニン賛歌に由来する。ヴェルトフとしてはトーキー第2作にあたるが、残念ながら録音状態が大変悪く、音量レヴェルが一定していない。

3月3日(土) 午後4時開映  
—ロバート・フラハティ選集(1)—

## 極北の怪異 Nanook of the North

米：レヴィヨン兄弟商会1920～21年作品  
脚本・監督・撮影＝ロバート・フラハティ 編集助手＝チャールズ・ジェルブ 出演者＝ナヌク、ニエラ、アレエ、カナユー、コモック 無声・白黒・58分

\* \* \*  
ロバート・J・フラハティ(1884～1951年)は、〈ドキュメンタリーの父〉と呼ばれ、特にこの「極北の怪異」はドキュメンタリー映画の祖と呼ばれている。彼はグリアスンに始まるイギリス・ドキュメンタリー運動に多大な影響を与えたのみならず、あらゆる映画作家に映画の新しい可能性を見せた。ミシガン州に生まれたが、父が鉄や金の鉱脈探しに従事したため辺境地区のキャンプ暮らしが多く、幼少の頃からインディアンをはじめ少数民族とのお出逢いが頻繁であった。長じてミシガン鉱山学校に学び、さらに1910年から16年にかけて何度もカナダのハドソン湾北東部を探検・調査した。サー・ウィリアム・マッケンジーが彼のスポンサーだった(1912年から21年にかけて鉱学的踏査をした)このフィルムの巻頭には書かれている。この地のエスキモーにカメラを向け約3万フィートに及ぶ記録フィルムを撮影したが残念ながらネガ焼失の憂き目にあう。1920年、再びエスキモーの地アングヴァ半島を訪れ、そこに16ヵ月滞在したフラハティは、イティヴィムイ族の長で猟の名手として知られるナヌク(熊)の意とその一家を撮影した。最終的に5万3千ドルとなった製作費は毛皮商レヴィヨン兄弟商会が出し、宣伝映画として作られた。この地方はイングランドに匹敵する面積に3千人に満たないエスキモーが生活しており、フラハティは彼らと生活を共にして、様々な暮らしぶりを捉えることに成功した。ナヌク一家(妻ニエラ、子供アレエ)とカナユー、犬のコモック)が、町へ毛皮等売りにカヌーでやって来る所から映画は始まり、氷原の漁、セイウチやアザラシの猟などが次々に描かれてゆく。特に、イグルーと呼ばれる雪と氷の家をセイウチの牙のナイフ一本で作り上げ、氷の窓をはめ込むところ、氷の下に見えるい敵と戦うところなどは今見ても感動的である。また、レコードとまじし音が外来文明の象徴としてユーモラスに使われている。ラストの犬の遠吠えにも深い哀しみがある。パテ社が配給し、1922年6月11日ニューヨークのキャピトル劇場で封切られ、新鮮な驚きと批評家の絶賛の中で大ヒットすることができた。日本では1924年3月21日に公開されている。上映するプリントは英語タイトル版である。